

# 基礎生物学研究所雑感

志 村 令 郎

昨年、思いもかけず細胞情報（客員）部門を担当することになって未だ1年に満たない私が、“基礎生物学研究所10年の歩み”に寄稿することになり、正直なところ大変とまどっている。未だ人様に話をするほどの研究成果を基生研ではあげてはいないし、また研究所について印象記を書くほどには十分な経験をもち合わせていないからである。それで基生研に籍を置くようになって以来、私の身邊に起った変化の■からいくつかのトピックスを選んで、雑然と書くことにする。

基礎生物学研究所が、設備等の面で大学では到底考えられないほど優れていることは、私が基生研と深く関り合うようになる以前から、多くの人から聞かされていた。多くの場合このような話は、やっかみも含めていろいろな尾鰭がついていたのも事実である。基生研が設備などの点できわめて恵れていることは、実際に研究所に籍を置き内部を見聞した現在、むべなるかなと思わざるを得ない。ただ私が以前と異なる点は、かつてはその感嘆の科白に付加されていた批判めいた言葉を、他人事として聞き流していたものが、今や皮肉られ批判される当事者となってしまい、そのような皮肉や批判に対して釈明する立場に回ったことである。それにしても、よい研究条件にいるのならば、それに合った内容の研究成果をあげるべきだという声は、やっかみとして簡単に片付けることは出来ない。国際的に高く評価されるような高度な質の研究成果をあげることによって、このような声に応えなければならないと思っている次第である。

基生研をめぐる問題で、私にとって最大なことといえば、高等植物を材料にして研究を始めたことである。学生時代に植物学科に在籍し、大学院修士課程で植物生理学の講座に所属していた。また Ph. D. の thesis にした研究は、高等植物におけるリジンの生合成の回路と、それに関連した酵素に関与するものであった。その意味で、私が植物に affinity があったのは事実である。しかし長い間御無沙汰して素人同然となってしまった分野であれば、余程の機会がない限り再びそこで事を起すのは容易でなかった。基生研は、まさにその機会を私に与えてくれたのである。

現在、基生研の細胞情報部門では、主としてシロイヌナズナ (*Arabidopsis thaliana*) を用いて、高等植物の分子遺伝学的研究を始めている。現在のところ、日本に限らず国際的にも、植物の分子遺伝学ないし分子生物学は、動物に比べて遅れていると言わざるを得ない。しかし外国においては、私の知人、友人も含めて、原核生物、酵母、ショウジョウバエ等を研究していた連中が、たとえばシロイヌナズナなどを用いて、漸く高等植物の分子遺伝学的研究を始めた例が少なくない昨今である。従来、

我が国の分子遺伝学・分子生物学における問題の展開は、ともすれば外国に遅れることが多かった。植物の分子遺伝学的研究においては、未開拓な分野が多いだけに、今後の研究の展開のさせ方によっては、我が国が外国をリードするようになることも可能となろう。そして基礎生物学研究所が、このような植物の分子生物学的研究を推進する上で、主導的な役割を果たすことができればと希望しているのである。分子遺伝学は、その歴史を回顧すれば明らかなことであるが、その昔、物理学や化学などを専門にしていた研究者が、遺伝学を中心にした生物学に挑戦して事を起こし、その輝かしい基礎を築いた。その意味では、植物学に疎い素人の私ではあるが、多少ともこの分野に貢献し、基生研に役立つことができることもあろうかと、虫のよい考えを抱いているのである。

(細胞情報研究部門教授)